

## 「脱ストレスのためのふれあい、 語らいの場（コミュニティ）のシステムづくり」

森下 和紀

### 1. 和歌山での「コロニヘーヴ」づくり

農園芸を基礎にしたコミュニティの創出・維持を目的に、筆者は平成21年2月より、英国人と知人と共に、和歌山市内で、300坪の休耕地を借りた。そして、休耕地をなんとかかしたいという考えを同じくする2人と、畑づくりを行ってきた。これは、筆者が居住する海南市や隣接する和歌山市でも、休耕地が目につくようになってきたことがある。そこで、その休耕地を農地として再生して、地域コミュニティの核としての役割を担うことにより、心のふれあい、語らいの場にしていきたいと考えた。同時にこの取り組みは、現代というストレス社会からの脱却を図るため、週末には土に触れよう、という提案でもある。

畑づくりにはデンマークのコロニヘーヴという菜園をモデルにした。これは、デンマーク語で集合体を意味するコロニーと庭の意味のヘーヴという言葉から生まれた概念で、「庭・菜園のコミュニティ」を意味する。実際、デンマークでは、このような菜園が法律のもとに整備されており、週末や休暇をコロニヘーヴで友人や家族で過ごすことが文化として根付いているという。また多くのコロニヘーヴには小屋が併設されており、それによって畑作業だけでなく憩いや交流が生み出せている。そこで、このコロニヘーヴをモデルとした「かまやまコロニヘーヴ」をつくるために、「かまコロプロジェクト」と名付けたグループを設立した。そして、和歌山市NPO・ボランティア推進課による「わかやまの底力・市民提案実施事業」に応募したところ、「できることからすぐする部門」に採択され、50万円の交付金を得ることができた。

### 2. 多文化交流を推進する 「かまコロプロジェクト」



図1 かまコロプロジェクトの活動拠点(筆者撮影)

「かまコロプロジェクト」では、コロニヘーヴという日本人にとって新しい家庭菜園文化が、市民相互の交流や人と地域との結びつきを生み出すヒントになると考えた。その際、休耕地の活用が交流の懸け橋になるだけでなく、地域の活性化にも役立つと確信した。そこで、上記の公募事業では、和歌山市かまやま麓山地区の畑、約300坪にて、毎月最終日曜日に交流会を開催・収穫祭やイベントを開催する「交流プログラム」と、畑作りワークショップの開催、木工ワークショップの開催・食育ワークショップを開催する「学びのプログラム」（食べて学ぼう世界の野菜など）を実施した。

今回、国際交流も事業目的の軸に置いたのは、和歌山市内在住の外国人が地域との交流を求めているというニーズを得たためであった。

そのため、休耕地を有効に活用してほしいという農家のニーズとをマッチングし、市民が抱える課題を市民の手で解決を図るプロジェクト

として位置づけた。よって、国際化の視点を「多文化交流」と銘打ち、多様な場を設けることとした。

こうしてかまやまコロニヘーヴの畑には、多くの市民が集い学ぶのだが、重要なのは次の休耕地利用に向けて“卒業”していくことである。

なぜなら、畑の経験を持つ人々が第三者が設定した場を離れ、自ら休耕地を再利用していく動きが市内各地に広がることを期待しているためだ。

無論、簡単なことではないが、実現すれば、地域のつながり力が増し、コミュニティ再生や多文化交流が図られ、住みよいまちへと導かれ、言うまでもなく市民の手によるソーシャル・イノベーションとなる。

実際、休耕地活用に向けた市民の雰囲気づくりの端緒を今回の事業で見ることができた。それは、かまやまコロニヘーヴとして休耕地を耕し出したところ、隣の休耕地の荒れ放題が目立つようになったのだが、すると、隣の休耕地の所有者が畑に出て、耕すようになったのだ。そして2010年度の末には畑として整地され、野菜を栽培するに至った。

畑が荒地となっていく光景は、これからの食に対する不安のみならず、住み慣れたまちの穏やかな心象風景の乱れにもつながる。

市民レベルによる小さいながらも、農園芸に触れる体験を得ることは、地域コミュニティの維持・発展が導かれるという観点から、文字通り草の根的な社会福祉の充実をもたらす意義があると考えられる。

### 3. 園芸福祉とコミュニティ

今回の取組を通じ、改めて園芸活動は、交流の契機と場を生みだし、健康的で健全なコミュニティを形成しうることを実感した。上述のとおり、休耕地が耕されると、隣地の人々がいてもたってもいられず、快適な住環境の創造と維持に取り組む場面に立ち会えたためだ。よって、協働で園芸活動を行うという共通体験や収穫物を分かち合う経験によって、社会性が養われ、それぞれの日常生活で地域の活動を発達させていくことへの期待が高まる。

そもそも理想的なコミュニティガーデンには、利用する住民の自主的な運営が必要とされている。花や緑を求めて人が集い、自分たちが楽しみながら花のケアをするとき、そこに生まれる小さな会話がコミュニケーションを育むためだ。

日常生活に密着した地味で派手さはない取り組みである。しかし、小さな達成感は、継続的な園芸活動への萌芽となりうる。特に、今回は自治体の事業に採択されたために、他地域からの来訪者を受け入れることもあったのだが、そうした外部からの注目を集めることで、住民には自信と誇りが与えられ、継続への意欲がかき立てられた。こうして引き出された住民の意欲が、次のステップの園芸活動に結実し、コミュニティの絆を強くしていくと言えよう。

「園芸福祉」という言葉は、まだ多くの人にとって馴染みが少ないと思われる。既に2001年4月には、「日本園芸福祉普及協会」という団体も設立されているが、例えば高齢者が生きる楽しみや目的を持つ、生きがいを与える活動の



図2 農作業で畝作りをする外国人(筆者撮影)

一つとして、ますます園芸には注目が集まっている。

そこでは、気張らずに楽しい時を持ちながら、ゆったりして活動的なものが好ましいと考えられている。比較的軽作業の多い園芸は、格好の健康法のひとつなのだ。

園芸は、育てる喜びと収穫する喜び、そしてそれらを他者と喜び合う喜びと、当人の喜びをより大きくする契機にあふれている。また、社会とのつながりを実感し、人間らしく生きている充実感を味わうことで、孤独感の解消だけでなく、他人のために役立っているという充足感をもたらされる。これらが原動力となってさらに大きな喜びを求めて、行動が推進される。これからの福祉政策の中では高齢者の自立的な生活を送れるようにするかが課題となってくるが、園芸は地域での生きがい創造の手段として結びついたとき、園芸福祉という領域を確かなものとなると捉えている。

#### 4. 今後の展開

筆者は、本研究科に入学する前年、2008年度の「ソーシャル・イノベーション型再チャレンジ支援教育プログラム」を受講し、「休耕地を週末に癒しの場に変えるプロジェクト～デンマークのコロニヘーヴをモデル事業に」を、修了時の事業提案発表会でのプレゼンテーションにて発表した。その際のコメント等を踏まえ、「農園芸（土）を基礎にしたコミュニティで、人はやすらぎを得ることができる」という考えのもと、この実践的研究を進めている。

本報告で接近したとおり、標題に掲げた「脱ストレスのためのふれあい、語らいの場（コミュニティ）のシステムづくり」のためには、地域コミュニティの形成、再生が不可欠である。行政、企業、NPOや地域住民のパートナーシップにより、顔の見える地域社会づくりが重要であることは論を待たない。ここに、園芸福祉の果たす役割の大きさを見いだすことができる。

人々の癒しと潤いを与えてくれる園芸福祉の実践活動に更なる発展を導き出すと共に、分析のための理論的観点の深化によって、研究テーマを精緻に取り組んでいきたい。